慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「満州国」商工業都市：1930年代の奉天の経済発展
Sub Title	Commercial and industrial city of "Manchoukuo": the economic development of Fengtian in 1930's
Author	張, 暁紅(Zhang, Xiaohong)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2008
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.101, No.1 (2008. 4) ,p.107- 122
JaLC DOI	10.14991/001.20080401-0107
Abstract	1930年代奉天は満州国最大の商工業都市として発展した。工業においては, 人口増加と後背地市場の拡大に牽引されて消費財生産高も急速に拡大する一方, 鉄西工業地区の造成とともに, 金属工業や機械工業が立地し, 奉天は満州国の重化学工業の拠点として成長した。奉天は商業の面においても満州国の結節点の位置を占めた。集散地市場として多量の商品が輸移入し, 移出される一方で消費材集散都市として後背地に消費財を移出したのである。 In the 1930s, Fengtian developed into the largest commercial and industrial city in Manchoukuo. Its industry, driven by population growth, expansion of the hinterland market, and a sudden expansion of consumer goods production, in addition to the construction of the Tiexi industrial district and the location of metal and machinery industries, all contributed toward the development of Fengtian as Manchoukuo's heavy and chemical industrial base. Moreover, Fengtian occupied an important centralized node position in Manchoukuo even from the commercial perspective. As a market and center of trade, a large amount of products were imported and shipped to or from other parts of the country. In addition, Fengtian produced and sold consumption goods to the hinterland, also functioning as a center of trade for consumption goods.
Notes	小特集：日本帝国勢力圏都市の形成と膨張の比較史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20080401-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「満州国」商工業都市―1930 年代の奉天の経済発展―

Commercial and Industrial City of "Manchoukuo"― The Economic Development of Fengtian in 1930's―

張　暁紅(Xiaohong Zhang)

1930 年代奉天は満州国最大の商工業都市として発展した。工業においては，人口増加と後背地市場の拡大に牽引されて消費財生産高も急速に拡大する一方，鉄西工業地区の造成とともに，金属工業や機械工業が立地し，奉天は満州国の重化学工業の拠点として成長した。奉天は商業の面においても満州国の結節点の位置を占めた。集散地市場として多量の商品が輸移入し，移出される一方で消費材集散都市として後背地に消費財を移出したのである。

Abstract

In the 1930s, Fengtian developed into the largest commercial and industrial city in Manchoukuo. Its industry, driven by population growth, expansion of the hinterland market, and a sudden expansion of consumer goods production, in addition to the construction of the Tiexi industrial district and the location of metal and machinery industries, all contributed toward the development of Fengtian as Manchoukuo's heavy and chemical industrial base. Moreover, Fengtian occupied an important centralized node position in Manchoukuo even from the commercial perspective. As a market and center of trade, a large amount of products were imported and shipped to or from other parts of the country. In addition, Fengtian produced and sold consumption goods to the hinterland, also functioning as a center of trade for consumption goods.

「三田学会雑誌」101 巻 1 号（2008 年 4 月）

「満州国」商工業都市

——1930 年代の奉天の経済発展——

張　　暁　紅

要　　旨

1930 年代奉天は満州国最大の商工業都市として発展した。工業においては，人口増加と後背地市場の拡大に牽引されて消費財生産高も急速に拡大する一方，鉄西工業地区の造成とともに，金属工業や機械工業が立地し，奉天は満州国の重化学工業の拠点として成長した。奉天は商業の面においても満州国の結節点の位置を占めた。集散地市場として多量の商品が輸移入し，移出される一方で消費材集散都市として後背地に消費財を移出したのである。

キーワード

奉天，鉄西工業区，重化学工業化，消費財生産，集散地市場

1.　はじめに

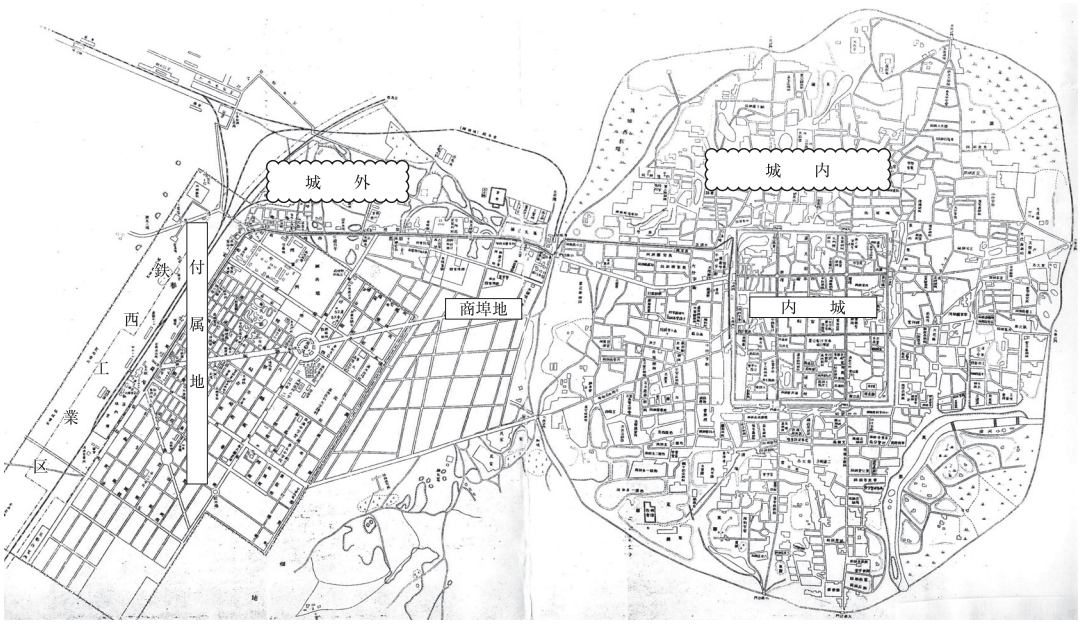
奉天は元代以前からすでに小さな都市を形成したといわれる。清初に都として繁栄し，以後，「満州国」（以下では「」を省略する）の建国まで，中国東北部の政治，経済，軍事の中心都市であった。満州国の成立とともに政治の中心が新京（現，長春）に移ったものの，商工業の一大中核地としての役割を果たし続けてきた。

満州国時代の奉天市市歌は次のように歌われている。「都市中奉天形勢雄，瀋水南流，白山東崇，縦横街衢，高楼雲外聳，協和万邦文物盛，輪軌四達工商興，進展応無窮…」。この歌詞は政治的な意図は別にして，都市奉天の地理環境，市内の様子以外に，鉄道が発達しており，商工業が興っているという奉天の特徴がよく示されている。

奉天市は，南方は渾河に臨み地勢は平坦で，西方は一望千里の沃野であった。図 1 のように，その市域は城内と城外の二つの地域に大別され，さらに，城内は内城と外城の二城，城外は鉄道附属地と商埠地に分けられる。

城内地域は清代初期の都時代の建築構造が基本的に継承されている。内城は正方形のレンガ壁をもって囲まれ，中央に宮殿，督軍公署等がある。城壁には小西，大西，小南，大南，小東，大東，小北，大北の八門があり，外部との交通には関門が設けられている。「井」字型に交差する四つの大通

図 1　奉天市街図



出典：奉天商工会編『奉天産業経済事情』1942 年。

りを商店街として小西門より大東門に通じる大通りには，鐘楼と鼓楼があった。両楼の間は四平街と呼ばれ，各種商店が軒を並べていた。城外は古くから奉天市民の主な住宅地となり，さまざまな家内工業，手工業，あるいは 1920 年代以降，機械工業が発展した地域であった。

商埠地は，東は城内と隣接し，西は満鉄付属地および同線路に接した地域である。各国商人の居住営業のため，清政府が指定した地域である。

鉄道付属地は，商埠地の西側の地域を占め，南満州鉄道線路を挟み，日露戦争後日本がロシアより東清鉄道南半分を譲り受けると共に継承したものである。その後，鉄道付属地の都市計画の進展とともに，鉄道線西側の工業地区（鉄西区）や東側の商業地域，さらには日本人住宅街が形成され，発展した。

以上のような市街分布から明らかなように，奉天の城内，鉄道付属地および商埠地の三つの地域はそれぞれ違う目的・計画をもって形成された地域である。とりわけ城内は旧市街，鉄道付属地は植民地的な要素が強いといえよう。

奉天市のこのような特徴はすでに橋谷弘と塚瀬進の一連の研究によって指摘されている。橋谷は，日本の植民地都市の形成に対して三類型を設定し，「日本の植民地化によって都市形成が始まった」第一類型の釜山，仁川，高雄，基隆，大連，および「伝統的都市と植民地都市の二重構造」をもつ第二類型の京城，台北と違い，奉天は日本の植民地都市が「既存の都市の近くに新たに日本の植民地都市が形成されたため，二つの都市が重ならずに並存して」おり，典型的な「既存の都市と植民

地都市の並存」タイプの第三類型であると指摘した。[1]

塚瀬は奉天内部で活躍している日本商人と中国商人に注目し，日本商人中で多数を占めていた付属地の小売商人が中国人の経済活動にかかわっていた側面は希薄であったこと，営む商業内容によって例外もあるものの，日本人の居住も商業的活動も満鉄付属地に集中していたことを明らかにした。[2]

以上の二つの研究は，奉天都市内の地域的特徴および国籍別経済圏の分離性を重視・強調したものである。奉天の都市形成や住居・商工業者経営活動の展開地域などを国籍別でみると，奉天は確かにそういう特殊性をもっている。しかし，商工業都市奉天を一つの都市としてみる時に，どのような産業上の特徴をもっているのかについてほとんど触れられていない。

本稿は，人口増加や商工業発展に伴う都市の膨張，支配政策の変化に伴う工業構造の変化，満州における奉天の商業的な役割の側面に着目して，満州国最大の商工業都市であった奉天市経済の特徴を明らかにすることを目的とする。

分析にあたって，満州国建国後 1930 年代の工業と商業の両面から奉天の特徴を検討する。工業においては，鉄西工業区建設からはじまった工業都市としての奉天の経済的膨張に注目し，1930 年代の奉天工業の特徴を明らかにする。商業においては，奉天の商品流通を検討し，奉天市場は満州国においてどのような存在であったのかをみる。これらの分析を通じて，商工業都市としての奉天像を描き出したい。

2.　奉天の工業構造の変化

2.1　鉄西工業区と付属地の発展

1930 年代の奉天経済の動向を考察するには，まず工業から論じなければならない。それはこの時期の奉天において，工業が発展の原動力となっていたからである。

満州国は建国後，経済建設に関する声明を発表し，大産業政策の大綱に基づき，1933 年に奉天，安東，吉林，哈爾濱を四大工業地区に設定した。奉天工業地区とは本来，鉄西工業区，奉天東工業区からさらに撫順，鞍山をも含めた一大工業圏のことであるが，ほとんどの場合，鉄西工業区のみ指すことが多い。

鉄西工業区は，満鉄が 1918 年から将来の工業用地として，東北政権の反対を押し切って入手したものである。満州事変までに満蒙毛織，東洋拓殖，奉天製麻，満州窯業，満蒙商会などの各社が工場・事務所をここに設置した。[3] 満州国設立後，当該地区は中核工業地に指定されるとともに，満

---

(1)　橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館，2004 年，39 頁。

(2)　塚瀬進「奉天における日本商人と奉天商業会議所」波形昭一編著『近代アジアの日本人経済団体』同文舘，1997 年，同『満州国の日本人』吉川弘文館，2004 年。

(3)　福田実『満州奉天日本人史』謙光社，1976 年，190 頁。

表 1　鉄西工業区操業中工場名簿
（資本金 100 万以上，1937 年 3 月現在）

単位：千円

	工場名	資本金
1	満州電信電話	50,000
2	明治製菓	6,000
3	大林組	5,000
4	嘉納酒造	5,000
5	日本ペイント	5,000
6	本嘉納商店	5,000
7	中山鋼業所	3,000
8	満州機器	3,000
9	昌和洋行	2,500
10	満州製麻	2,500
11	満州麦酒	2,500
12	亜細亜麦酒	2,000
13	秋田商会木材	1,500
14	大同製薬工業	1,500
15	江崎利一	1,000
16	大矢組	1,000
17	日満鋼材鋼業	1,000
18	野田醤油	1,000
19	満州皮革	1,000
20	無限製材	1,000

出典：奉天商工会議所『奉天産業経済の現勢』1937年, 132–135頁。

州国政府と満鉄の共同出資によって設立された奉天工業土地股份有限公司（株式会社）（資本金当初 250 万円，後 550 万円）の経営下に置かれた。1937 年 10 月，同社は解散してその資産および営業権一切を奉天市公署に譲渡し，鉄西工業区は市営となった。(4)

当地区は満州国政府と満鉄が一体となって大々的にバックアップした工場誘致地区であったため，その発展と繁栄は約束されたものだと考えられていた。奉天商工公会会長の石田武亥は，鉄西工業区は労力，敷地，動力，用水，交通，後背地の市場などにおいて何一つ欠けるところはなく，今後鉄西工業地はどこまで伸びるか，まったく予想できないと語り，(5) また奉天市副市長の土肥顓は鉄西工業区をもつ奉天市を「東洋のマンチェスター」に例えたほどであった。(6)

鉄西区工場招致状況をみると，1936 年時点では操業工場 36 軒，生産額 1200 万円であったが，1939 年 1 月になると，工場数は 191 工場で（うち操業中のもの 107，工事中 36，未着工 48 工場），操業工場の生産額は 8372 万円を示し，36 年の 7 倍にも増加した。(7)

1937 年 3 月現在，土地貸付申込手続きを完了した各種工場のうち，資本金 100 万円以上の工場

---

(4)　「鉄西工業地の沿革」『満州経済時報』第 21 巻，第 9 号，90 頁。
(5)　「鉄西工業地の繁栄策は？」『満州経済時報』第 21 巻，第 9 号，101 頁。
(6)　「鉄西工業地区の概況」『満州経済時報』第 21 巻，第 9 号，92 頁。
(7)　前掲「鉄西工業地区の概況」，92 頁。ただし，この生産高は公表不能工場を除いたものであるため，実数はさらに大きいものと考える。

をあげると表 1 のようになる。進出工場を業種別にみると，ビール，酒，醤油醸造など各醸造工業，鋳物，機械器具，金属製品あるいは一般鉄鋼業のほか，染色，塗料，電機など 30 余種類にわたっている。(8)

表 2　奉天鉄西工業区・付属地における満州国建国後新設工場

（1936年末現在）

種別	鉄西工業区			付属地			合計		
	工場数	投資額	生産額	工場数	投資額	生産額	工場数	投資額	生産額
	軒	千円	千円	軒	千円	千円	軒	千円	千円
金属	7	6,331	4,000	12	5,162	11,000	19	11,493	15,000
機械器具	3	500	1,700	7	16,234	4,300	10	16,734	6,000
化学	4	850	660	4	15	55	8	865	715
窯業	2	200	194	5	260	183	7	460	377
紡織	1	20	0	1	1,000	2,030	2	1,020	2,030
食料品	11	6,737	2,760	18	4,481	4,555	29	11,218	7,315
雑工業	8	1,374	2,867	21	1,495	4,913	29	2,869	7,780
計	36	16,012	12,181	68	28,647	27,036	104	44,659	39,217

出典：奉天商工会議所『奉天産業経済の現勢』1937年，149−150頁。

同じ時期に，奉天付属地でも工場建設ブームが起こった。同地域の新設工場数，投資額および生産額は鉄西工業区以上であった。表 2 によると，付属地新設工場は工場数，投資額，生産額，いずれにおいても鉄西工業区を上回っており，その合計生産額は 2 倍以上にも達している。両地域合計 104 工場のうち，投資額の多いのは機械器具，金属，食料品工業であり，生産額の多いのは金属，雑工業，食料品と機械器具工業である。このうち生産額で雑工業の大部分を占める煙草製造は満州国建国前から操業していたから，当該期の鉄西工業区と付属地における工業経済の膨張はおもに重工業と食料品を中心とするものであったことがわかる。

このように，国策レベルで始まった奉天工業地区建設による工場の業種と工業の発展は，重点的に建設された鉄西工業区にとどまらず，ほぼ同時期に付属地でも確認できた。こうした新規投資は奉天の工業構造にどのように反映されたのか，奉天工業にとって 1930 年代はどのような時代であったのかを，次項でみていこう。

2.2　奉天における工業構成の変化

表 3 は 1932 年と 1940 年の奉天における工業生産額を比較したものである。まず奉天工業の満州国における比率をみてみよう。奉天は 1932 年には工業生産額で満州国最大の比率を占めていた。その生産額は 1932 年から 40 年の間に急速に増加すると共に，満州国に占める比率も 21 %から 26 %に上昇している。32 年には機械器具，窯業，紡織，雑工業が満州国で首位を占め，40 年になると，さらに食料品工業，機械金属も最大の比率を占めるようになった。(9) とりわけ，機械器具工業の

(8)　奉天商工会議所『奉天産業経済の現勢』1973 年，132–135 頁。

(9)　満鉄経済調査会『満州産業統計』1932 年，経済部工務司『満州国工場統計』1940 年。ただし，1940 年の統計には特殊工業が含まれていない。生産額の多いこれら工業を含めると比率は幾分低下すると

表 3　奉天における工業生産額

	満州国に占める比率		1932年		1940年		増加倍数
	1932年	1940年	千円	%	千円	%	
金属	4	14	481	1	70,018	13	146
機械器具	12	66	2,350	5	92,078	18	39
化学	2	18	893	2	54,565	10	61
窯業	33	17	1,087	2	19,942	4	18
紡織	41	34	13,013	28	72,654	14	6
食料品	9	20	5,062	11	74,858	14	15
雑工業	54	39	23,480	51	140,278	27	6
合計	21	26	46,366	100	524,393	100	11

出典：満鉄経済調査会『満州産業統計』1932年，経済部工務司『満州国工場統計』1940年。

奉天への集中度が高くなっていることがわかる。

建国初年（1932 年）の奉天の工業構成をみると，雑工業が奉天合計工業生産額の半分以上を占め，次いで高いのは紡織工業と食料品工業である。機械器具工業や窯業，化学工業，金属工業は微々たる比率を占めるに過ぎない。

さらに，雑工業のうち，煙草製造が圧倒的な比重を占めており，煙草製造だけで奉天合計工業生産額の 45 %に達していた。[(10)] これは英美煙公司（英米トラスト），中俄煙公司（中ロ合弁），東亜煙草会社（日本）をはじめ，8 社の煙草製造工場が奉天に集中していたためであり，東北で製造される煙草の 7 割以上を奉天で生産していたからである。[(11)]

以上から明らかなように，1932 年の奉天の工業は東北経済に大きな比重を占めていたものの，重工業の発達はほとんどみられず，綿業を中心とした紡織ならびに精穀などの消費財生産を特徴としていた。[(12)]

しかし，こうした構成は 1940 年には大きく変化した。1932 年と比べると，1940 年の工業構成は明らかに重化学工業のウェイトが高くなり，1940 年の奉天工業は，満業系資本を主とする奉天造兵所，満州飛行機，満州自動車を主力産業とする資本，満鉄資本を主とする交通産業系資本，住友財閥系資本による通信および精密工業関係資本，三菱，三井，満州工廠などの特殊機械器具工業，[(13)] また工場建設に牽引されて窯業が成長した。1930 年代末，奉天は満州国の重化学工業化の一大拠点に成長したといえよう。[(14)]

考えられる。

（10） 前掲『満州産業統計』1932 年，81–90 頁。

（11） 奉天商工会議所『奉天経済三十年史』1940 年版，442 頁。

（12） 拙稿「満州事変期における奉天工業構成とその担い手」（九州大学『経済論究』第 120 号，2004 年 11 月）を参照されたい。

（13） 奉天商工公会『奉天産業経済事情』1942 年，47 頁。

（14） これについて鈴木邦夫編『満州企業史の研究』の須永徳武論文でも指摘されている。須永氏の論文によると，1930 年代後半，奉天が大連を抜いて「地場」企業数，生産額でトップになった。

このように，1940 年時点になると，金属，機械工業の発展が顕著に表れるが，1932 年の時点では紡織工業と食料品工業は雑工業に次いで高い生産額を示していたこと，1936 年の紡織・食料品の両産業生産額が機械器具をやや上回る生産額を鉄西地区で示していることに注目したい。さらに重要なことは，奉天全体での 1940 年の工業生産額をみても，紡織と食料品ともに 7000 万円を超えており，「雑工業」の突出を除くと重化学工業と消費財産業がそれぞれ発展していることである。奉天では，重化学工業の躍進とともに，消費財産業の発展も並行して生じていたのである。そこで，次に奉天における紡織工業・食料品工業について簡単にみておきたい。

1932 年，奉天における紡織工業は，生産額では雑工業に劣るものの奉天全体の約 28 %を占め，工場数，職工数では最大で，奉天の中心的産業であった。(15) 紡織工業の中で生産額の最も多い業種は綿織物業であり，奉天市は満州で綿織物業の最も発達した地域となっている。奉天の綿織物生産を担ったのは奉天紡紗廠と中小綿織物業者である。奉天紡紗廠は 1921 年（営業開始は 1923 年）に中国官商合弁会社として創立された。20 年代の業績は極めて良好であり，東北の紡績業の中心的企業として発展したが，30 年代になると，同廠は経営が停滞し，38 年に鐘紡によって買収され，鐘紡奉天紡として再生の道を歩んだ。奉天の中小綿織物業は，設備 5 台以上を有する工場を統計範囲とする 1935 年の統計によれば，当時 101 軒もあった。(16) これらの業者は中国人居住地のある旧市街の近くに位置しており，生産規模が零細であるものの，軒数が多く，奉天市内および後背地への綿布供給において大きな役割を果たした。(17)

奉天の綿織物生産は常に満州国政府の綿業政策による影響を受けていた。日本の綿織物業の発展を優先した「適地適応主義」の下で取られた 1934 年の関税政策は日本綿布の輸入を増加させ，満州の中小綿織物業にかなりの打撃を与え，その生産額は伸び悩んだ。(18) しかし，1937 年末，円ブロック向け輸出の制限および満州国紡績工業五ヵ年計画の実施にともない，満州の綿業は「自給自足」政策の影響を受けて生産額が一時的な急上昇をみせたのである。

1940 年の紡織工業において，生産額の最も多い業種は染色業である。染色業が満州国時代に大きく発展したのは，主に生地綿布と加工綿布の輸入関税におけるその差額が大きかったからである。(19) 1940 年に奉天の代表的な染色工場は，鐘紡系の康徳染色股份有限公司，満州染色廠，福増湧染

（15） 前掲『満州産業統計』1932 年によれば，1932 年の紡織工業は工場数が 763 軒，職工数が 2 万 7468 人，いずれも最も多い業種である。

（16） 産業部大臣官房資料科『綿布並に綿織物工業に関する調査書』1937 年，30 頁。

（17） 拙稿「1920 年代の奉天市における中国人綿織物業」政治経済学・経済史学会『歴史と経済』194 号，2007 年 1 月。

（18） 拙稿「「満州国」第一期経済建設期の関税政策と綿業」日本植民地研究会『日本植民地研究』第 19 号，2007 年 6 月。

（19） 1934 年の満州国第二次関税改正後，輸入関税の引下げ率をみると，一反につき大尺布の場合，生地大尺布 64 銭→ 46 銭，染色大尺布 25 銭→ 54 銭；粗布の場合，重量 11 ポンド半を超え 15 ポンドを超えないもの 1 円 79 銭→ 1 円 15 銭，重量 15 ポンド半を超えるもの 2 円 15 銭→ 1 円 40 銭，染

色工場である。康徳染色は 1937 年 11 月に資本金 50 万円をもって創立された。職工数は約 250 人，各種織物の染色加工業を営んでおり，一年目の生産額は 600 万円をあげ，業績はよかったといわれる。その原料織物は約 8 割までが鐘紡など日本の諸工場から輸入され，地場では奉天紡紗廠から買い入れられた。製品は主に中国人向け無地織として販売され，その販路は全満に及んだ。[20]

毛織工業では日系の満蒙毛織株式会社が満州唯一の毛織物会社であった。同社は 1918 年に資本金 250 万円で設立された。1937 年時点で，工場敷地は 5 万余坪を有し，従業員日本人約 230 名，中国人約 1700 名，年間生産能力毛織物約 120 万ヤード，毛糸 48 万ポンド，帽子 6 万ダーツであり，羊毛使用量は満州羊毛の約半数を占めている。[21]

最後に食料品工場についても簡単に触れておこう。1932 年，食料品工業の過半の生産額を占めていたのは精穀業であったが，[22] 40 年になるとその割合が低下し，菓子製造業や日本酒，味噌醤油などの醸造業が発展した。菓子製造業も醸造業も満州事変後に新設された工場が多い。これらのうち新式機械工場はすべて鉄西工業区に立地した。日本酒や味噌はほぼ日本人消費者向けのものであるが，菓子製造業の場合，日本人のみならず満州人口の九割以上を占める「満人」も重要な消費者であった。新式工場で生産されているビスケットなどの製品は「満人」にも人気を呼んだのである。

以上，みてきたように，1930 年代，諸工場の集積に伴う人口増と奉天後背地への市場拡大（後述）を反映して紡織工業，食料品工業など消費財産業も発展した。次いで，奉天の人口について簡単に概観してみよう。

2.3　奉天人口の拡大

1930 年代，工業の急速な発展によって労働需要が逼迫し，奉天は常に労働者不足の状況に置かれていた。鉄西工業区の報告によると，いずれの工場においても職工，主として熟練工が不足しており，職工引抜き争奪戦が展開されていたという。各工場は自己工場内の職工をできる限り外部に出さず，宿舎を工場内に設置するなどの対策をとるほどであった。[23]

一方，奉天市は 30 年代に入って，人口が急速に増加した。この状況を表 4 で確認してみよう。これによれば，1920 年代末 34 万人であった人口は満州事変で一時減少するものの，満州国の建国以降急速に増え，39 年には 86 万人に達している。総人口に占める比率は 30 年代後半に高まっており，当該期に奉天が他地域以上に発展していることが確認できる。

人口増の中心は中国人であるが，その多くは中国本土からのいわゆる「入満者」であった。奉天

色粗布 2 円 34 銭→ 2 円 30 銭；細布の場合，生地細布 2 円 15 銭→ 1 円 25 銭，染色細布 2 円 34 銭 → 2 円 30 銭。（満州輸入組合連合会商業研究部『満州における染料』1937 年，28–31 頁。）

（20） 前掲『奉天産業経済の現勢』，280 頁。

（21） 前掲『奉天産業経済の現勢』，262 頁。

（22） 前掲『満州産業統計』1932 年，81–90 頁。

（23） 前掲「鉄西工業地区の概況」，92 頁。

表 4　民族別奉天人口累年表

年	満州国人口(A)	奉天市				
		合計(B)	B/A	中国人		日本人
	万人	万人	%	万人	%	万人
1928	2,803	34	1.23	32	92	2
31	2,996	31	1.05	29	92	2
33	3,088	47	1.53	42	89	6
35	3,420	53	1.56	45	83	9
37	3,695	71	1.93	61	86	10
39	3,945	86	2.19	72	84	14

出典：奉天市公署『奉天市統計年報』1937年，奉天商工公会『奉天産業経済事情』1942年，『満州国国勢グラフ』1937年，1940年により作成。
注：1931年までの「満州国人口」数字は「満州」人口の合計である。

省の 1935 年の入満者は 14 万 6 千人台で，全入満者数の 33 %を占め，36 年には 10 万 2 千人台で，28 %も占めていた。[24] これらの大多数の移住先は奉天，鞍山，撫順であった。彼らは工事や工場労働者の需要状況によって移動する者が多いため，離満者数も高いが，生産と消費の両面から奉天経済に対して大きな影響を与えた。1935 年の奉天市警察庁戸籍係の統計によると，人口の大量移入にともない，家屋の不足が生じたという。日満貸家業者は「小規模の株式会社を組織し，或は個人経営に依り実地を買収し満州式家屋を建築しているが，本年既に城内，商埠地に百棟乃至四百棟の貸家を十三ヶ所建築したが，全部貸付済である」[25]，という状況であった。

一方，中国人の増加速度以上に急増したのは日本人であった。30 年代初頭に 2 万人（奉天人口の 6 %）に過ぎなかった日本人は 1939 年には 14 万人（16 %）にも達したのである。彼らの急増は日本企業の増加と一攫千金を求める渡満者の増加に基づいている。[26] 日本人の増加は居住地の満鉄沿線地域に活気をもたらした。その活況ぶりを示す事例として奉天付属地の夜店の店舗増大と膨張をみてみよう。奉天付属地の夜店は 1925 年ごろから始まったが，当時は閑散としていた。満州国建国後，付属地住民の増加とともに，春日町を中心とした地域で夜店は繁盛した。1934 年 7 月は付属地に 334 軒の夜店があり，1935 年 5 月に 456 軒に増加した。さらに出店場所でみると，34 年 7 月は春日町 166 軒，青葉町 168 軒であったが，35 年 5 月は春日町 252 軒，青葉町 165 軒，加茂町 39 軒となり，発足当初の春日町から青葉町に広がり，さらに 35 年に入って加茂町へと発展をみせたのである。[27]

このように，奉天経済の膨張は都市人口の増加を促し，また逆に人口の増加が消費財産業など奉天都市経済の発展を可能にしたのである。

---

(24)　これは大東公司奉天事務所が入満許可者に支給した査証によるものである。（奉天商工会議所『奉天産業経済の現勢』，164 頁）
(25)　奉天商工会議所『奉天商工月報』第 362 号，1935 年 11 月 15 日，64 頁。
(26)　柳沢遊『日本人の植民地経験』青木書店，1999 年，249 頁。
(27)　前掲『奉天商工月報』第 359 号，1935 年 8 月 15 日，42 頁。

3.　奉天市場における商品流通

本節では，1930 年代に奉天の都市経済が拡大していく過程で奉天市場が満州国においてどのような存在として位置づけられるのかを，奉天経済で大きな比重を占めた綿布流通を中心に検討したい。(28)

3.1　商品流通とその特徴

まず奉天の貿易額状況からみていこう。表 5 は 1929 年から 1936 年までの奉天の輸移出入額を表したものである。

同表によると，奉天でも満州事変の影響が深刻であったことがわかる。しかし，以後輸移出入ともに急速に増加している。すなわち 1932 年は前年比 250 %前後増加し，総輸移出入額は 1 億 3800 万円に増えた。32 年以降も高い増加率を維持し，36 年の時点で，輸移出額は 1 億 4800 万円，輸移入額は 2 億 3900 円に達したのである。輸移出と輸移入の差額をみれば，奉天は入超が続いていることがわかる。産業開発に伴う生産資料の輸移入と人口の急増に基づく消費物資の輸移入額が膨張した結果である。

表 6 によって奉天の物資流通の特徴をみてみよう。同表は奉天駅の重要貨物の輸移出入の動向を A（輸移出なし），B（輸移入額<輸移出額），C（輸移入額>輸移出額）の 3 類に分けてみたものである。奉天の輸移出入物資のほとんどは鉄道を通じてなされたから，同表によって奉天の物資流通のおおよその特徴を把握できよう。

第一に指摘できるのは，A 類の金物，銅，亜鉛，染料，鉱油などのような重化学工業生産の生産素材（原料）となる製品は，奉天に輸移入された後，輸移出されていないことである。さらに，こ

表 5　奉天輸移出入貿易額（1929-1936 年）

	合計		輸移入		輸移出		入超
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比	金額
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円
1929	164	-	110	-	54	-	57
30	104	63	66	60	38	71	28
31	56	54	35	53	21	56	13
32	138	247	84	244	54	252	30
33	223	161	118	140	78	144	41
34	293	131	177	150	103	133	74
35	404	138	234	132	130	126	104
36	444	110	239	102	148	114	92

出典：奉天商工会議所『奉天経済三十年史』1940年，417頁より作成。
注：1932年以降の数字は32年の物価でデフレートした（1932年100，33年113.6，34年104.4，35年111.2，36年114.7）。

(28) ただし，ここでは経済統制期は分析対象としない。経済統制期の綿布流通構造（配給構造）は平時と違う特徴をもつものだと考えるからである。

表 6　奉天駅重要貨物の輸移出入高（1936 年）

単位：トン（綿製品：千梱，白米：千叺，麦粉：千袋）

	品名	入	出		品名	入	出	%
A類	豆油	4,170	–	B類	清涼飲料水	418	2,503	599
	漬物	2,181	–		味噌	324	1,846	569
	缶詰	1,701	–		雑穀類	39,935	72,788	182
	金物類	78,473	–		酒類	6,162	8,477	138
	銅類	1,366	–		醤油	2,311	3,031	131
	亜鉛類	4,067	–		獣毛類	1,674	1,975	118
	錫類	233	–		獣皮類	2,149	2,447	114
	眞顔類	312	–	C類	煙草類	15,665	14,710	94
	アルミニウム及同製品	100	–		雑貨類	10,618	9,240	87
					麻及麻織物	11,568	9,964	86
	其他金物	1,030	–		綿製品	219	160	73
	染料	3,107	–		鉄類	71,296	47,294	66
	塗料	1,692	–		工業用油	4,254	2,552	60
	硝子類	4,337	–		陶器	5,880	3,251	55
	電用品	3,753	–		薬品及植薬材	3,409	1,029	30
	自動車及同付属品	1,203	–		白米	229	54	24
					綿花	4,609	670	15
	林産物	129,228	–		菜菓類	37,053	4,533	12
	鉱産物	4,884	–		セメント	677	78	11
	鉱油	15,975	–		麦粉	2,339	219	9
	機械	2,548	–		紙類	24,367	1,516	6
	ゴム製品	1,995	–		海産物	22,529	931	4
	木製品	1,857	–		石灰類	43,722	608	1

出典：奉天商工公会『奉天経済統計年報』，1937年版，44–47頁，113–121頁より作成。
注：A類は輸移出なし，B 類は輸移入額＜輸移出額，C 類は輸移入額＞輸移出額。%は輸移入に対する輸移出の比率である。

れらの製品の輸入先を追ってみると，1936 年満州国輸入金属品および鉱砂品 5077 万円のうち 4340 万円，機器および工具 3892 万円のうち 3068 万円，雑類金属製品 3862 万円のうち 3485 万円が日本からの輸入品であることがわかる。(29) こうした事実は奉天の重化学工業化がその素材を日本に依拠しつつ進行していることを意味している。奉天の重化学工業化は顕著であったが，それは基本的には満州国内で完結しておらず，日本からの生産財や原材料品による補完を必要としていたのである。

もうひとつ指摘すべきは，奉天における重化学工業生産は後背地重化学工業を支えていたことである。たとえば，奉天の鉄工業「中山鋼業所」は亜鉛引鉄板，洋釘，琺瑯鉄器などを生産していたが，琺瑯鉄器は哈爾濱を中心に北満方面をはじめ沿線各地および地場よりの注文が多かった。「日満鋼材工業」は機械部では新京発電所，小野田セメント，撫順の松風工業など，鉄道部では鞍山工材，三菱などと取引していた。(30)

第二に，軽工業製品について言えば，農産加工品を別として，B 類の味噌，醤油，酒類は輸移出が輸移入を上回っていることから明らかなように，奉天が消費財生産都市としても成長していることである。C 類のうち輸移入に対する輸移出の比率が高い煙草や毛織物，綿製品，雑貨類などは奉

（29） 満州国経済部『満州国外国貿易統計年報』1936 年，34–37 頁。
（30） 前掲『奉天商工月報』第 361 号，1935 年 10 月 15 日，26 頁。

天の代表的な製造品であったことからもこの点は窺えよう。こうした事実は 1930 年代において奉天の重化学工業の発展と同時に，奉天市内のみならず，後背地市場にむけた消費財生産が大きく発展したことを流通面から裏付けるものと言えよう。

たとえば，奉天商工会議所の調査によれば，清酒醸造の「嘉納酒造」は，売上高が軍納入も含めて 350 石のうち 4 分の 3 を，鉄道を通じて各沿線方面に出荷していた。「千代の春」は売上高のうち 7 割以上，「満州千福」も 4 分の 3 を哈爾濱，斉斉哈爾，図們，間島，熱河方面などの各鉄道沿線に販売していた。醤油醸造も鉄道沿線地方からの需要が多かったとされている。毛織物工業の「満蒙毛織株式会社」は大口取引先に満州国政府と各官庁があるが，それ以外に同社は大連，奉天城内，新京，吉林，哈爾濱，斉斉哈爾，延吉，錦県の八ヶ所に出張所を設けており，製品の販売を促進している。(31)

第三に指摘できるのは，奉天の物資消費地と集散地としての性格である。紡織工業製品の綿製品，麻製品や食料品の海産物，麦粉，菜果，また煙草，紙，鉄，陶器，薬品，工業用油などの C 類に明らかなように，奉天では輸移入される商品のうち再び他地域に輸移出されているものが少なくない。こうした事実は奉天が大きな消費市場であるだけでなく，鉄道沿線および商人勢力エリアの中心市場であり，外国市場あるいは東北市場と奉天後背地の集散地市場であったことを意味している。以下では集散地市場としての奉天をみていこう。

3.2　奉天における綿布の集散状況

奉天が集散地市場として大きな役割を果たすことになったのは奉天の鉄道輸送の発達と深くかかわっている。奉天から後背地へ商品を運搬する際の主な輸送手段は鉄道と馬車である。近隣地は馬車によるものが多いが，都市間は鉄道輸送を中心としていた。図 2 で奉天を中心とした鉄道網を確認しよう。奉天には大連と新京を結び東北を縦断する満鉄本線が通っており，北は新京において哈爾濱と結ぶ京濱線に接続する。西は奉山線によって山海関まで続き，さらに中国本土鉄道線により天津，北京へ通じる。東は安東につながる安奉線により，あるいは吉林に続く奉吉線，さらに新京と図們を結ぶ京図線により朝鮮国境に通じている。鉄道の発達は商品をより迅速かつ多量に奉天まで輸送することに貢献しただけでなく，商品流通の結節点としての奉天の役割もよりいっそう大きくした。

奉天市場の商品集荷は満州国最大の規模であったが，奉天市場から各需要地への荷物分散状況はどうであったのか，各市場へどのような割合によって振り分けられたのかを，綿布に絞って検討していこう（表 7）。

奉天から発送された綿布は満鉄線（29.3 %），奉山線（20.0 %），四洮線（9.2 %），奉吉線（8.3 %）

（31） 前掲『奉天商工月報』第 361 号，1935 年 10 月 15 日，24–25 頁。

図 2　奉天を中心とした鉄道網

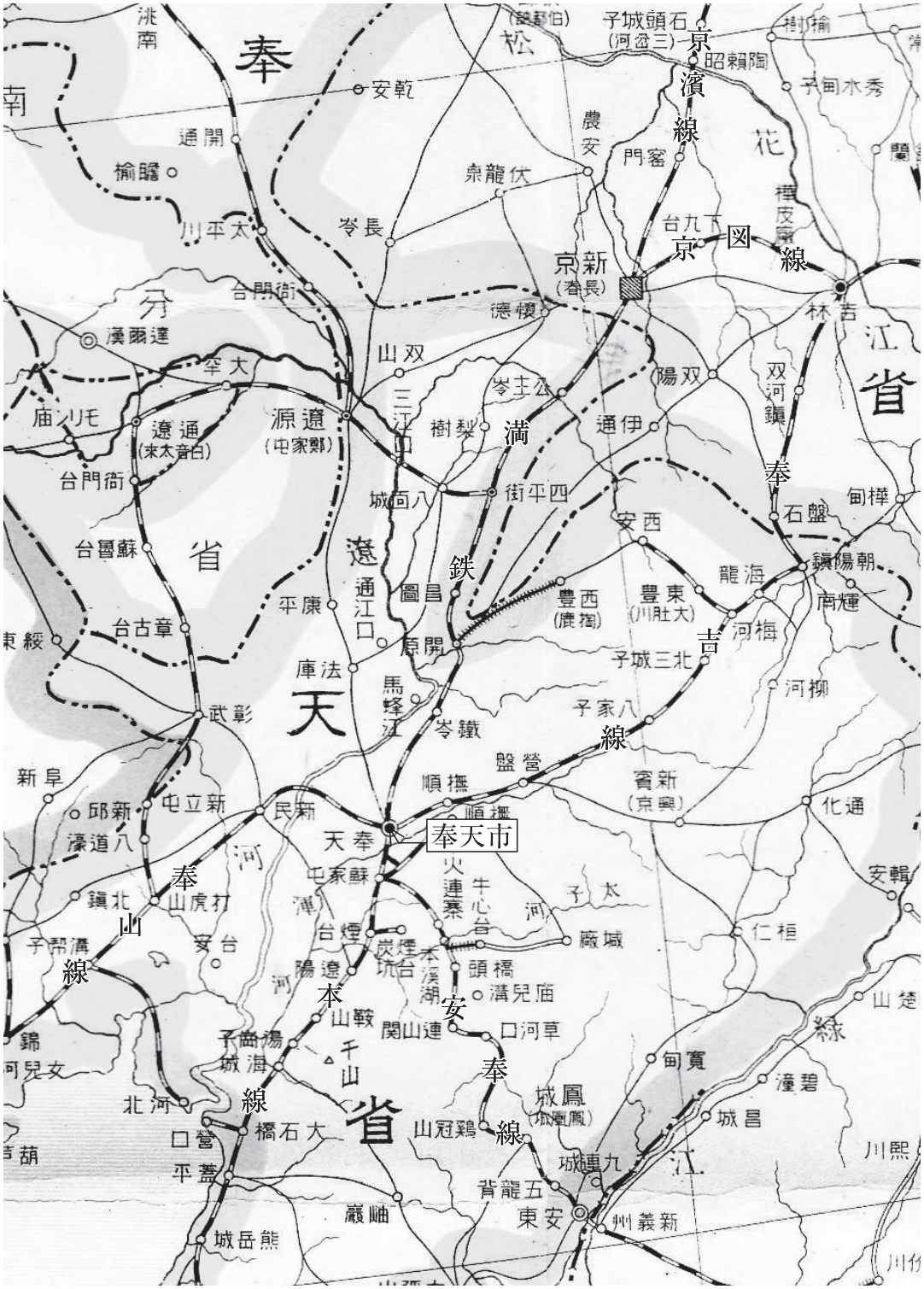


表 7　奉天経由綿布発送量

		梱数（梱）	比率（%）
満鉄線	計	35,505	29.3
	営口	673	0.6
	安東	105	0.1
	撫順	1,765	1.5
	新京	5,991	5.0
	その他	26,971	22.3
四洮線		11,113	9.2
京図線		3,807	3.1
奉吉線		10,000	8.3
奉山線		24,300	20.0
北満	哈爾濱	2,164	1.8
	その他	5,221	3.4
合計		92,110	76.1
残高		28,912	23.9

出典：満州輸入組合連合会『満州に於ける綾織綿布並加工綿布』1936年，385頁。

表 8　奉天後背地綿布消費人口および消費額

		人口数	推定消費額
		万人	万円
満鉄沿線一帯（哈爾濱－営口）	小計	1,161	3,950
	奉天，撫順地方	234	550
	撫順，本溪湖		200
	遼陽南，営口地方	228	800
	鉄嶺，開原，四平街	324	1,100
	新京	100	300
	北鉄南部線	125	450
	哈爾濱	150	550
四洮線，洮斉線一帯		193	600
奉山線，錦承線一帯		460	1,200
奉吉線一帯		170	500
京図線一帯		141	500
合計		2,125	6,750

出典：満州輸入組合連合会『満州に於ける金巾，粗布及大尺布』1936年，59-60頁。

などの鉄道線路を通じて沿線各地に運ばれていき，各地域に到着した後，さらにこれらの地域を中心に分散されていく。奉天市場に残された綿布は 23.9 %を占めているが，このすべてが地場消費されるのではなく，小包輸送を利用して遠隔地へ発送したものも含まれている。地場消費と小包輸送の割合についてであるが，加工綿布でみると 7 対 3 程度であるといわれているから[32]，おおよそ 20 %弱が地場消費されたと考えられよう。

奉天の綿布後背地市場は以上のように膨大なものであった。表 8 によれば，奉天後背地の人口は 2125 万人，推定綿布消費額は 6750 万円であり，満鉄沿線がその半分くらいを占めており，おもな綿布の消費地であった。同表に示している地域からみると，北は北満の斉斉哈爾，納河，西は中国本土

（32） 満州輸入組合連合会『満州に於ける綾織綿布並加工綿布』1936 年，386 頁。

との隣接地である承徳，東は安東省の付近の岫巖まで広がっている。満州国建国前から，奉天は南満州の満鉄沿線への消費財供給地であったが，満州国支配圏の拡大と鉄道網の拡充によって，1930年代後半になると，その性格はさらに強まり，さらに北満の一部を後背地市場に組み込みつつあったと考えられよう。奉天市場で取引された綿布のうち，8割前後が後背地に移出された[33]。これは価格に直すと2720万円ほどになり，後背地推定綿布消費額6750万円の4割を占めていたのである。

4. おわりに

以上，1930年代満州国支配下の奉天を工業と商業の両面から検討してきた。明らかにしえたことを要約して本稿を終えたい。

奉天は満州国最大の工業都市として成長した。1930年代初頭，奉天では重工業がほとんど発展しておらず，綿業を中心とした紡織工業ならびに精穀，食料品などの消費財生産を特徴としていた。しかし，満州国建国後，奉天は工業地区に指定され，鉄西工業区が造成された。同地区や隣接の満鉄付属地に金属工業や機械器具工業の諸工場が立地するとともに，奉天経済は膨張し，急速に重化学工業化した。奉天は1930年代において満州国の重化学工業の一大拠点に成長したのである。

重化学工業の発展とともに注目されるのは，この時期綿業，染色業，毛織物業を中心とした紡織工業や製菓，醸造などの食料品工業が奉天の人口増加と後背地市場の拡大に牽引されて大きく成長した点である。

中小織物業を除くと，こうした奉天の新設工業を主として担ったのは日本資本であった。染色業と毛織物業における日本資本の支配的な役割は30年代初めから定着していたが，唯一の民族紡績資本であった奉天紡紗廠も30年代後半に日系企業によって買収され，近代的な紡織工場における日本資本支配が確立したし，醸造業などの食料品工業もその多くは日本企業によって設立されたのである。満州国内の都市建設と人口増加はこれらの消費財産業の発展とその流通拡大をもたらした。

1930年代奉天の輸移出入額は急増し，奉天は商品流通においても満州の結節点の位置を占めた。その物資流通の特徴は次のように特徴づけられる。第一に重化学工業生産の素材となる物資は主に日本から専ら輸移入されるにとどまり，輸移出されることはなかったことである。これは奉天の重化学工業化が日本に依拠しつつ進行していることを意味していた。第二に奉天が最大の消費都市であるにも関わらず，紡織工業や食料品工業の発展を受けて，これら製品の輸移出が輸移入を上回るか，輸移入に対する輸移出の比率が高くなっていたことである。これは奉天が消費財生産都市としても成長したことを意味していた。しかし第三に，奉天は多量の商品が輸移入されると同時に多くの商品が再び他地域に輸移出され，消費市場であるともに集散地市場としての性格を持っていたと

(33) 奉天商工公会『奉天経済統計年報』1937年によると，1932年の奉天駅経由，輸移出綿布数量は輸移入に占める比率は67％，それ以降さらに上昇し，1935年になると88％にものぼった。

いうことである。

この集散地市場としての状況を綿布流通についてみると，奉天には満鉄沿線を中心に 2 千万人を越える人口を抱える後背地があり，奉天市場で取引された綿布のうち 8 割前後は後背地に移出されていた。奉天の消費財生産都市としての成長や集散地市場としての発展はこれら後背地に支えられていたのである。

（中国大連理工大学管理学院）